

[45] radix : 九州大学全学共通教育広報

<https://hdl.handle.net/2324/20410>

出版情報 : radix. 45, 2006-09-29. 九州大学教養部大学教育研究センター
バージョン :
権利関係 :





Azalea

第50回田島寮寮祭

禪 (たすき) ～想いつなぐ一本の絆～



第50回田島寮寮祭を終えて

実行委員長 ^{なか} 中 ^の 野 ^{いっ} 一 ^{せい} 静

1ヶ月に及ぶ田島寮寮祭がようやく終わった。5月20日の駅伝大会から始まり、体育系では、バスケットやサッカー、文化系では、お絵かきやゲームなどさまざまな種目を一年生が棟ごとに競い合った。今年で第50回を迎えるこの田島寮寮祭の面白いところは、競技する一年生自身が企画・準備・運営を行うということだ。二年生のアドバイスをもらうこともあるが、当日の進行に支障をきたさぬよう、一年生は担当する競技の企画書を何度も何度も練り直していた。また、6月24日に行われた樽神輿では棟ごとに1位が赤、2位が青、3位が黄のふんどしをつけて、顔をくしゃくしゃにしながらも懸命に神輿をかついでいた。

今回の寮祭を通して、寮祭実行委員は2つのことを伝えたかった。

楽しく、時には辛い寮祭を通して、彼ら一年生は仲間という一生消えることのない絆を手に入れたはずだ。確かに普通のスポーツ大会においても、その仲間は得られるかもしれない。しかし、この田島寮寮祭では、赤いふんどしを勝ち取るために協力し合う仲間と、生活を共にしている。そんな中では、一年生は互いのプラス面だけでなく、マイナス面すらも目の当たりにしてきただろう。それを指摘しあい、互いの人間性を高めあうことができるのは、田島寮寮祭において得られた仲間だけではないだろうか。これほどの深い絆はこの寮祭においてしか決して生まれえない。

もう1つ伝えたかったものは、やる時はやるという気概だ。目の前につきだされたものを後先考えず、ま

ずやってみる。赤いふんどしを取るためにがんばること、ましてやそのふんどしを着けて神輿をかつぐこと、それ自体も今では周囲の人からは冷やかな目で見られるかもしれない。でも、そんなことはどうでもいい、理屈じゃない、と覚悟を決めて立ち向かうことが重要ではないだろうか。確かに後に残るのは結果だけだ。もちろん、それは大事であるし、社会に出れば、結果だけしか評価されないだろう。しかし、それに誇りがもてるかどうかは目の前のことへの取り組み方次第だ。そのとき自分が後悔しないためにも、やる時はやる、という気概をいつまでも忘れないでほしい。

第50回田島寮祭のテーマは、「禪」～想いつなく一本の絆～であった。50年という本当に長い歴史とともに、寮生の50年分の想いがつながれてきた。寮祭実行委員は今年の一年生にその大切な想いが伝わったと信じている。その想いをまた来年の一年生に、「禪」として受け渡されていくことを心から願っている。

この1ヶ月という長い期間一年生は本気でこの記念すべき寮祭に取り組んでくれるのか、最初はそんな不安もあった。しかし、どんな競技においても真剣に打ち込む一年生の姿には感動すらおぼえた。そしてまた、一年生のかつぐ樽神輿の上からの景色も壮観だった。みんな本当によくがんばった。ありがとう。

最後に、この寮祭を通して、応援・協力していただいた方の数は計り知れません。寮祭実行委員を代表して心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。





田島寮寮祭を振り返って

薬学部 2年 とん

しん
金金

日本に来る前に、日本についてのビデオやテレビ番組から、日本にはいろんな祭りがあることを知りました。日本に来て日本の伝統的な文化もぜひ味わいたいと思いました。九州大学に入学して、田島寮に入りました。仲の良い友達や知り合いもないこの地福岡で、これからの大学生活はどうなるのかと考え、たくさんの不安でいっぱいでした。田島寮に入ってからは、一緒に住んでいる友達や先輩方にいろいろなことを教えてもらって、生活の面でもたくさん助けてもらいました。皆がまるで家族のように生活し、田島寮の暖かさを感じました。そして、去年の寮祭が始まる前に、先輩方に「寮祭ではいろんな競技があって、参加すれば肉体的にも精神的にもつらいかも知れない。原則的に、日本人の寮生は全員強制参加することで、留学生なら別に参加しなくても大丈夫」と説明されました。せっかく日本の学生寮に入ったのだから、日本の文化を体験する絶好のチャンスである寮祭に積極的に参加してみました。その寮祭の中では仲間達と一緒に戦ったり、お互いに応援したりして、みんなが一致団結できました。寮祭の楽しさをたっぷり味わった上で寮生の間の友情もより一層深まりました。ただひとつ残念だったのは、その寮祭に参加した留学生は私一人だけだったことです。留学生と日本人の間に言葉の壁もあるし、自ら寮祭に参加するという意志を持つことは大変難しいでしょう。もしそこで彼らに寮祭のことを詳しく説明して寮祭に誘ってあげる人がいれば、留学生たちも寮祭に参加しやすくなり、大切な友情を得ることができるだろうと思いました。だから今年は、仲間達と協

力し、田島寮では留学生の枠を崩して、留学生でも楽しめる寮祭を作りたいと考えて、寮祭の実行委員をしようと決心しました。

寮祭をうまく運営するために、寮祭の実行委員達は何回も何回も会議を開きました。会議の中では皆が真剣に意見を出して、討論も行いました。そこで自分の意見が採用された時の喜びそしてお互いの信頼感も感じました。正直に言うと、普段あまり使わない命令形で一年生に指示を出すことに自信がありませんでした。話を聞いてくれるだろうか、ちゃんと返事してくれるだろうか、いろいろ心配でしたが、寮祭は始まりました。一年生達は指示通りにしてくれて、それに日本人も留学生も問わずに皆団結してどんな試合でも本気を出して戦いました。彼らの姿を見るだけで感動しました。本祭で一年生達にその一ヶ月間に流れた汗と涙の結晶である神輿を担いでもらったとき、自分の気持ちも最高潮に達しました。本当に実行委員をして良かったと思いました。いつも日本の祭りを見てみたいと思っていたのですが、まさか自分がその祭りの主役の一人になるとは考えても見ませんでした。この寮祭は私の一生にとっても最も大切な思い出になると思います。

寮祭はあっという間に終わりました。一年生達はこの寮祭で楽しんでくれたでしょうか。楽しむことよりもっと大切なものは、この寮祭を通して一生大切にすべき仲間達ができただけのことでしょう。これからも国籍を問わずに、皆が仲良くなって、暖かい寮を作って行きましょう。それが田島寮だと思います。





第50回田島寮寮祭に寄せて “25年ぶりの樽神輿”

九州大学松原寮同窓会会長 ひ わ た し か ず ひ ろ
(第25回田島寮寮祭副実行委員長) 樋 渡 和 浩

九州大学田島寮第50回寮祭 樽神輿局 × , 赤, 青, 黄の3台の神輿の上から, 威勢のいい若者たちの声が, 天神のビル街に響き渡る。行きかう人たちの視線は, 25年前と同じく, 赤, 青, 黄, 3色のふんどし姿の担ぎ手たちに釘付けである。そうだ彼らこそが寮祭のメイン “樽神輿” の主役たちである。

50回の記念寮祭のテーマは “襷 (たすき)”, 神輿の上では袴姿の実行委員が叫んでいる。神輿が肩に食い込む痛みは半世紀の歴史の重みだ。神輿の下で彼らも応じる。わっしょい, わっしょい, わっしょい, わっしょい。祭りはすでに最高潮だ。

“祝 第50回田島寮寮祭”, まず, 寮祭を立ち上げた50年前の先輩方に敬意を表すと共に, 多くのOB, 現寮生のほか, いつも影で寮生を見守り, 歴史の下支えをしてこられた寮務係をはじめとする大学関係者の方々と, 喜びを分かち合いたい。

実は, 私も25年前, 副実行委員長として樽に乗せてもらった。その時のテーマは, “酔翔 (よいしょ)”, 破天荒な若者が数多くおり, 飛躍を求めたエネルギッシュな寮祭となった。フォークシンガー “河島英吾” を招いてコンサートを成功させたのは特筆ものだが, メインの樽神輿では力及ばず, 天神乗り入れ断念という汚点を残した。その無念さを晴らすかのように, 神輿は六本松で暴れまわった。思い思いに掛け声をかけ, 寮歌を歌った。少しの酒で酔いが廻るよう一升瓶を回し飲みしては, 団結踊りで氣勢をあげた。田島寮に戻った後も興奮収まらない後輩たちと樋井川に飛び込んだことを, 鮮明に覚えている。

さて, 25年の歳月を即座にタイムスリップさせてくれる学寮とは何なのだろう。学寮は勉学の間であると共に人間形成の間である。雑多の個性が入り乱れての共同生活, 夜な夜な至る所で酒を片手に討論会が催されていた。ともに喜び, 悩み, 悲しみを分け合あう中で醸成された絆は家族のように強か

った。また, 個々が寮自治に携わり, 種々行事の企画運営をすることで, 指導力, 企画調整力, 判断力, 実行力といった社会において武器となる資質体得の機会を提供し続けてきた。まさに, “伝統のぬか床” である。

人間は, 考えるがゆえに, 思い悩み, 迷う。そのため, 安息の場所を持つ人間は強い。寮生活を経験した我々にとって, 幼少の時代をすごした故郷のように, 学寮での思い出は財産である。そこに身をおけば, 何時も気安く迎えてくれる友があり, 問題解決のヒントがある。学寮はそんな心の故郷なのだ。学寮への愛着はそのまま九大への愛着, 誇りとなり, 日々の生活の大きな糧となっているに違いない。

私は, 現在, 九州大学松原寮同窓会の会長をしている。今年で23年目を迎えた同窓会には, 現松原寮生も含め300余名の会員が名を連ねている。寮をこよなく愛し, 寮生活が忘れられない者たちの任意集団である。今回, 田島寮があと数年で廃止されるというニュースを聞きつけ, いてもたってもいられず駆けつけた訳だが, 寮生の神輿を守ろうという志が伝わってきて嬉しかった。できれば, この田島寮のよき伝統を何とか残すことはできないだろうか。友を愛し, 寮を愛し, 母校を愛す心こそ, 今の時代に必要であるように思う。



第25回 (昭和56年) 別府橋交差点 付近
行進コース 田島寮 — 六本松 — 大濠公園

世界・日本



ドイツ・インターンシップ研修旅行記

法学部2年 ささ 笹 へ 部 とも 誠 こ 子

高校三年生の頃に、九州大学についてホームページで調べていたところ、ドイツ・インターンシップ研修旅行のページを見つけ、大変興味を持ったのがすべての始まりである。もともと、ドイツ語に興味があり、大学では第二外国語はドイツ語を学ぼうと決めていた矢先に、この旅行について知った。また、ドイツに行くなら、観光などで行ける大都市よりも、田舎町でドイツ人の素の生活に触れたいと思っていたので、田舎町でホームステイでき、しかもインターンシップまでできるというこのインターンシップ研修旅行は、まさに私が求めるものだった。他の大学にはなかった企画で、この旅行に参加したいという思いが動機の一つとなって私は九州大学を受験し、無事入学に至った。「来年の春、ドイツに行くんだ」という思いから、普段のドイツ語の授業にも身が入り、楽しく学ぶことができた。やはり言語は、使う機会を持って学ぶのが一番だと実感した。6月中旬に説明会があり、その一ヵ月後あたりから週に一度の勉強会がはじまった。この勉強会はもちろん、旅行のためのドイツ語会話の習得や旅行の手続きなどのためのものである。早い時期から勉強会があり、ドイツに行くという思いが持続できた。こうして半年と数ヶ月、ドイツに向けての準備を着々と進めていったのである。とはいうものの、言語面では、聞き取りがまだまだである上に、語彙力もなく、自分の意見を話せるレベルまでには到底達していなかった。ひたすらドイツ語を聞いて、耳に馴染ませるので精一杯だった。

このような状況の中、2006年3月、私はドイツへと旅立った。これから一ヶ月間、ドイツで暮らしていくかと思うと、期待ももちろんあるが、不安が大きかった。しかし、ドイツにつくと、そこは一面の雪景色で、まるで絵本のような世界が私たち参加者を迎えてくれた。さらに駅に着くや否や、ホストファミリーの温かい出迎えがあり、不安な気持ちは次第に消えていった。しかし、言語面については聞き取ることがなかなかできず、ホームステイ先の家族とコミュニケーションを取るのに苦労した。しかし、一日、二日と日を追うご

とに聞き取れる量や話せる量が増え、家族とも打ち解けることができた。ドイツに来て初めの一週間は毎日が目新しいことばかりで、とりわけ初めの三日間は、何が起るか分からないといった感じの、不安とわくわくする気持ちの入り交じった生活で、今思い起こしてもときどきするものだ。新しい世界へ飛び込む機会はあるものではないし、かつ外国で生活することもなかなかないので、貴重な経験ができたことを嬉しく思っている。

ここで、このドイツ・インターンシップ研修旅行について改めて簡単に説明しようと思う。中南ドイツの保養地として有名な Bad König に、一ヶ月間ホームステイをしながら、最初の一週間は午前中にドイツ語の語学授業を受け、午後は町の見学などを行い、残りの三週間はインターンシップをして過ごすという内容である。インターンシップ先は、自分で希望でき、仕事を体験することができる。日本ではなかなか簡単にはできない経験ではないだろうか。インターンシップ先の例を挙げるならば、幼稚園、パン屋、喫茶店、歯医者などある。ちなみに私は家庭用品の店で働いた。そこには、皿やコーヒーカップなどの食器だけでなく、蝋燭や花瓶、置物など家で飾るようなものも売っており、日々働きながら様々なものが見られて、楽しかった。在庫の確認や倉庫の整理から商品に値段を貼ったり、包装したり、店内の棚のディスプレイを考えたりと様々なことをさせてもらった。仕事の指示を聞き取ったり、質問したり、仕事の合間に日本のことやドイツのことなどを話したりした。初めは聞き取れる量も少なく、話し方もたどたどしかったのだが、次第に指



インターンシップ先の方々と

示の細かいところまでわかるようになり、話す言葉の量も増えていった。言い忘れていたが、ドイツのお店には昼休みがあり、大体13時から14時まで、店が閉まるのである。店員は一時間半の昼休みが与えられ、ご飯を食べに一旦家に帰っていった。初めは驚いたが、いい制度だと思う。インターンシップ先の店の上に副 Chef (Chef の娘さん) 一家の家があり、昼休みに子供たちと遊んだり、昼ごはんを一緒に頂いたりした。このように、店員さんと和気あいあいと仕事をするのができた。一見華やかなイメージの店員といっても、肉体労働の面もあり、仕事の大変さを知ることができた。接客のできるレベルまでドイツ語が話せたら、という思いが仕事の中にあり、さらなるドイツ語習得へのモチベーションが上がった。しかし、速い上に人それぞれに話し方に癖があり、聞き取るのは至難の業だった。日本人の店員がいることで、もの珍しそうな人や、ゆっくりとしたドイツ語で話しかけてくれた人もいた。

他にも、最初の一週間のドイツ語の語学授業のあと、午後にギムナジウムの五年生と十年生に日本について話す機会があった。日本の学校に関することや、子供時代に遊んでいたことなどギムナジウムの生徒が質問し、それにドイツ語で答えたり、折り紙や習字を教えたりした。折り紙で鶴を折るのは、なかなか難しいようだったが、皆興味津々だった。余った折り紙をあげたら、心から喜んでくれた。習字は、ドイツ語の生徒の名前を当て字にして漢字で書くと、非常に喜ばれた。学校から家への帰りのバスがよく分からなかった時に、生徒たちが教えてくれたのも、いい思い出である。

四週間のホームステイは、あっという間だった。いつも世話をしてくれたホストマザー、話し相手になってくれたホストシスター、温かく見守ってくれたホストファザー。この一ヶ月にしてもらったさまざまな恩は返しきれない。ピストロやテルマやドイツ料理のレストランに連れて行ってくれたり、家で一緒に CD を聴いたり、映画を見たり、折り紙をしたり、本当にいろんなことを一緒にさせてもらった。ホストシスターの Annika は、他国でのホームステイの経験があり、私の不安や悩みを感じ取ってくれ、お世話をしてくれた。ホストマザーの Brigitte は、半日だけ仕事をしており、私がインターンシップから家に帰った後、一緒にお茶をしたりして、私の拙いドイツ語をじっくり聞いてくれた。やさしくて、本当の母のように感じた。彼女の作ったポテトサラダの味が忘れられない。ホス

トファザーの Thomas は、検察官で、一度裁判所に連れて行ってもらった。家にいるときは、娘と仲がよく、見ていて微笑ましかった。

Bad König で生活していて、日本との違いはたくさんあった。食文化ももちろんさることながら、木造の広い家に目に優しい照明で、家族との団欒を大事にしていた。休日の昼には、お父さんもお母さんと並んでキッチンに立って手伝ったり、家族でテレビを見たり、音楽を聴いたりした。また友人同士の交流も大事にしており、平日の夜にサウナのあるプールに行ったり、遠方からの友人夫婦が泊まりに来たり、ランチをして友人を招いて食事をしたり、食後にゲームに興じたりしていた。

ドイツ滞在期間中の3月10日は、ホストシスターの Annika の18歳の誕生日だった。ドイツは18歳から成人として扱われる。いわば日本の20歳に相当する。偶然にも、節目の誕生日を祝うことができた。誕生日パーティーの仕方も盛大で驚いた。当日の夜に、友人が集まって Bistro で飲みながら、お祝いをした。次の日の夜は親戚中が集まり、ピュッフエ式の晩ごはんを食べたり、飲んだりしながら、話したり、ギターを弾きながら歌ったりした。このとき飲んだシャンパンは格別においしかった。

このドイツ研修旅行で、周りの人々の温かさ、ドイツ人の素敵な心配りに触れることができて、感銘を受けた。日本における日常が当たり前ではない世界に足を踏み入れたことで、帰国後、視野が広がった感を受けた。コミュニケーションの大事さを、ドイツ語を通じて感じる事ができた。聞こう、分かって、話そうとする姿勢、目を見て話すことなど、言語以前のコミュニケーションが大事なのだと思った。この旅行で様々な糧を得たように思う。またいつか、ドイツを訪れてホストファミリーとインターンシップ先の人たちなどこの旅行で知り合った様々な人たちに会いに行きたい。



ホストファミリーと

世界・日本



国際協力を学ぶ

こまつたろう
小松太郎

「国際協力は、そもそも何故するのだろうか?」。この問いを教室をほぼ満員にした110数名の学生に投げかけてみた。みな想像力を一生懸命働かせて、頭に浮かんだことを表現する言葉を探している。大学教育とはこういった訓練の積み重ねであろう。「困っている人を助けたいから?」「国際社会の義務?」「世界平和のために?」「国益?」「自身のため?」。これらはその時挙がった学生からの返答である。疑問形にしたのは発言した学生がみな少し自信なげだったからである。ある答えを出しながらも、「本当にそうなのだろうか?」という懐疑心を持っている。実はこの懐疑心、言い換えれば問題意識が大事である。現実にかけている諸問題は多様な側面があり、その側面を十分に理解することから、自らの立場・意見を形成することが始まる。

2006年度前期に開講された総合科目「多様化する国際協力」は、学生が国際協力について自ら考え、問題意識を持ってもらうことをその目的とした。そのための題材は十分に提供したつもりである。その「題材」とは実際に国際協力の世界で活動する様々な人々の話である。先の授業の様子は第1回目のオリエンテーションである。この授業では、「途上国のためというが具体的には誰のため?」「貧困とは?」「開発とは?」「誰が国際協力を?」というような問題も皆で考えた。次回から始まる講義を通して、具体的な活動について知るだけでなく、「なぜ」「誰が」「誰のために」という問題意識を学生に持ち続けてもらうためである。

リレー講義の講師については、各方面からの理解と協力を得られ、充実した講師陣となった。講師の選択においては主に地元九州に活動の拠点を置く団体・個人に来ていただいた。国際協力というと、何か自分の知っている世界とはかけ離れた場所で、日頃接点のない人たちが行っている活動という印象を持っている学生も多いと思うが、実は身近なところで国際協力活動に様々な形で関わっている人々がいることを知ってもらうためである。もう一つ、講師の選択にあたっては特定の国や地域、コミュニティを対象としてきめ細か

い支援を行っている団体の方々を中心をお願いした。国際協力というとODA（政府開発援助）による大規模インフラ事業というイメージがあるかもしれないが、実はそれだけではないということ気付いてもらうためである。また、リレー講義を通して浮かび上がってきた新しい国際協力の姿は、多様な国際協力団体とその活動がお互いに有機的なつながりを持つようになってきたということである。

講師陣は個人、NGO（事業型・提言型・ネットワーク型）、地方自治体（福岡市）、国際協力機構（JICA）、外務省、国際機関（ハピタット）、学者・研究者など、多様な顔ぶれとなった。また、講義内容は、環境、文化、教育、保健、福祉など、人間の生活に密接に関連する国際協力についての話が中心になった。ここに講義内容と講師のリストを載せ、改めてそれぞれの講師の方々に厚く感謝の意を表したい。

2006年度総合科目「多様化する国際協力」講義内容および講師陣

「国際協力におけるソーシャルワーク・国際社会福祉の役割とは?」 稲葉美由紀助教授

「歴史をふまえて未来を開く国際協力：周辺からグローバル化に対抗＝便乗してゆく企て」 清水展教授

「第二世代PKO：教育と平和構築」小松太郎助教授

「国際文化協力の現場から」 小川玲子助教授

「福岡でのNGO活動の現状とめざすもの」 西嶋克司氏（特活 NGO福岡ネットワーク）



「牛一頭から始める国際協力」

宇治松枝氏 (シモムラ医院)

「国際協力における政策提言活動」

大倉純子氏 (債務と貧困を考えるジュビリー九州)

「国際保健・健康政策分野における国際協力」

大谷順子助教授

「国際協力とは何かな? 国際協力とは海外, 途上国での活動だけなの?」

浅野哲氏 (JICA九州)

「国連ハピタットの活動とイラク復興事業について」

星野幸代氏 (国連ハピタット福岡事務所)

「福岡市の国際協力 - 福岡方式の技術移転を通して -」

境道啓氏 (福岡市役所)

「アフリカの貧困削減における日本のODAの役割」

北川裕久氏 (外務省経済協力局)

各講師の講義を聞いていて分かるのは、日々の仕事に忙殺されている実務家も、先程の「なぜ、だれが、だれのために」という根幹的問いを絶えず自問自答しているということである。学生諸君の多くはおそらく数年で社会人となる。そこでは誰からも疑問の余地を挟まれない仕事はあまり無い。みなジレンマを抱えながら、少しでも仕事を「あるべき姿」に近づけようとしている。「国際協力」という一見、人道主義的な行いも実は多くの闇を持っているし、そこに関わろうとする者にはそれなりの心構えが求められる。そういったこともこの授業から感じてもらえたのではないだろうか。

一方、受講生に注目してみるといくつかの興味深い点が見出せる。本科目は文系、理系を問わず、様々な学部の学生が集まった。数的に一番多かったのは法学部の学生である。やはり国際的な事象に対する関心が高い学生が多いのであろう。理系で比較的多いのは農学部であった。途上国の貧困は農村に集中している。環境問題などとも密接に関連する分野であり、農業は今後も途上国の大きな課題であり続けるだろう。その他、工学、経済、教育、医学、理学、21世紀プログラム等、満遍なく学生が集まっており、国際協力分野の裾野の広さに対応している。国際協力は「国づくり」支援とも言われる。その意味ではあらゆる分野がその対象となりうるのだ。

九州地区では国際協力の実態を知る機会はその程多くない。一方で国際協力に関心のある若者が多いのも事実である。国際協力について勉強したい、将来のラ

イフワークしてみたい、という学生がよく研究室を訪ねてくる。先日、JICAの東京本部で講義をすることになっていたが、先方の担当者が「私、九大を今年卒業しました。先生の講義を受けたことがあります」とメールしてきた。こういうのは嬉しい。国際協力に強い関心のある学生に対しては、この分野に特化した体系的な教育プログラムが必要となるであろう。

最後になるが、それぞれの講義の後には質疑応答の時間を取ったのだが、当初あまり学生の反応が無いのが気になった。1, 2年生が一緒ということで1年生が遠慮しているという声もあったが、「皆で考える」授業では、「間違った意見」などない。しかし、最後の講義後には幾つもの質問が出て、この懸念はある程度払拭された。また授業の評価はレポートの提出としたが、中には興味深い考察があり、学生からの指摘や提案を事業に反映させたいと語る講師もいた。日常業務に追われていると見えない、新鮮な視点が学生から提供されたのである。一方で、「自ら考える」行為を捨てて一般論やどこかの文献の切り貼りをしている学生もいた。同年齢の半分の若者が実社会で仕事をしている中で、もう一度「なぜ、大学にいるのか」という問いを真剣に考えて欲しいと思う。

なお、最終回は外務省経済協力局(東京)から講師に来ていただいたが、これは外務省の「ODA講座」という制度を利用させていただいた。日本の一般市民にODAをよりよく理解してもらうことを目的として始まった制度である。この時の授業の様子が外務省のホームページに記載されたので参照していただきたい。講義に対する学生の率直な感想が紹介されている。

(言語文化研究院)

外務省ホームページ:

http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/kaikaku/demae/houkoku_10.html



世界・日本



ハンガリー共和国セメルweis大学 体育スポーツ科学部滞在記

くま がい しゅう ぞう
熊 谷 秋 三

1) セメルweis大学体育スポーツ科学部の紹介

私は、昨年10月より本学部にて在籍し、運動と脳・認知機能に関する研究、および健康・運動疫学の教育に従事しています。なお、本学部と健康科学センター、人間環境学府との間には2005年10月に国際学術交流協定が締結されています。この学部は80年の歴史を有するが、特筆すべきは多くのオリンピックメダリストを輩出している点にあります。共同研究者で本学部の副学部長 Dr. Radak の説明によれば、一つの大学当たりのメダル獲得数では世界一とのことでした。この学部のメインビルディングの2階にある大理石の壁面には、本学部出身の金メダリストの名前が、ずらりと刻印され、講堂には写真が展示されています。

本学部の隣には体育スポーツ科学部の附属施設であるスポーツ医学病院があります。現在、新病院が建設中ですが、この病院にはスポーツ科学に関する基礎・臨床研究室やドーピング検査室も設置されるとのことでありました。さらに、本学部は国際オリンピック委員会から公式のコーチ養成機関としても認定されており、春と秋に4ヶ月間の講習会が毎年開催されています。まさに、名実ともに体育・スポーツ科学の振興に中核的な役割を担っている大学といえましょう。

2) ハンガリーで知り合った印象深い研究者

ブダペストでは、学術集会や研究・教育施設の訪問などで多くの研究者や指導者の方々と知り合うことができました。また、私のデスクを副学部長室に準備していただいたこともあり、本学部の教員の皆さんや各国からの研究者の方々ともお会いすることが出来ました。ここでは、こちらで知り合った印象深い研究者の一人である西ハンガリー大学教授の Dr. Banhidi を紹介します。彼の専門はスポーツ地理学ですが、united game (UG) と称される活動を国際的に展開している実践家でもあります。UG のモットーは、「言語、宗教、経済、文化の違いに影響されることなく、各国の人々が平和や存在の相互理解について異文化交流を通して互いに理解して行くこと、つまり結果ではなくプロセスを重要視する活動自体の中に意味が

あるとするプログラム」であろうと著者は理解しております。私は、5月下旬に西ハンガリーの小さな村にある Youth Education Center で開催されたUG にスペシャルゲストとして参加しました。中欧を中心とした近隣諸国6 - 7カ国から参加した高校生、大学生達と寝食を共にしながら楽しい時間を過ごすことができました。このUGには、オーストリアのグラツ大学の臨床心理士の Hussain 氏（モロッコ人）も参加していました。彼とは、モロッコの生活文化の話や、オーストリアや日本におけるメンタルヘルスの実態や背景に関する意見交換ができ有意義でありました。

また、Dr. Banhidi は、インドの子ども達を対象に毎年一回UGを実践しています。「日本人の子どもたちは学校が好きですか？」という彼の質問に対して、私は「嫌いな子どもが多いでしょう」と答え、彼は、「私が滞在中のインドの子どもたちは、全員学校は楽しいと言いました」と話してくれました。学ぶことの原点を知らされた思いの問答でした。私の友人である Dr. Radak は、「彼は伝道師です」と表現します。彼は大学人が果すべき社会・国際貢献を日常的に実践している人であり、私が尊敬すべき友人のひとりとなりました。

現在、彼とは成人障害者の身体活動の展開に関する共同研究をしておりますが、ハンガリーの Daka という町の成人障害者施設において運動療法室を彼と共同でオープンでき、その開所式を6月2日に挙行できたことは、著者の滞在中の最大の喜びでもありました。開所式には、この地域の首長も参加され、施設の障害者と職員の皆さんが織り成すダンス、合唱、マ스ゲームなどを楽しく鑑賞できました。また、開所式では私自身もスピーチする時間をいただき、有意義な交流ができました。

3) 印象に残った学生のためのスポーツ科学国際会議

第17回International Conference on Sports Science for Student (ICSSS) が、セメルweis大学主催で2006年4月下旬に開催されました。また、各国の教授らによるラウンドテーブルにも参加し、意見交換をす

る機会を与えていただきました。この会議は、34年前に旧ハンガリー体育大学の呼びかけで開催されました。今年で17回目を迎えています。2年に一回の開催であることから、歴史的には34年が経過していることとなります。34年前といえば、東欧と呼ばれていた社会主義時代に相当します。分野を問わず国内外における単独の学会では、学生への教育的支援が活発に行われていることは、ご存知の通りであります。しかし国内外において、“学生のため”と冠した国際会議の存在は、あまり知られていないような気がします。

私は、体育・スポーツ科学に関わる研究・教育に携わるものとして、今回の ICSSS の取り組みには深い感銘を受けました。ややもすると、自己の大学や研究室での研究教育活動に終始しがちな日本の研究・教育者のひとりとして、ICSSS が取り組んできたような国や大学を超えた貢献の実態を体験できたことは、私にとっては新鮮かつ衝撃的な出来事でありました。研究・教育のグローバル化が必要な分野は増えつつあります。体育・スポーツ科学分野に限らず、共同研究事業無しには、質・量ともに優れた研究成果のアウトプットが難しい状況にあるのは承知の事実であります。このような状況にあって、今後の若い研究者には、国際的なセンスと共に優れたコミュニケーション能力を備えておくことは必須の条件と考えられます。かかる課題の基盤・拠点形成は、誰が、またどこが担当すべきでしょうか。このような課題の解決に向けた取り組みもまた、大学人が解決しなければならない重要な任務であろうと思っております。

4) ハンガリー雑感

ハンガリーは1000年の歴史を有する国であります。蒙古から移動してきたマジャール民族によって建国されて以来、幾多の国との攻防を繰り返した歴史を有しています。ハンガリーは、古くはローマ軍やオスマントルコ軍、近年ではオーストリアのハプスブルク家、およびドイツさらにはソビエト連邦の支配下にもありました。だが、ベルリンの壁の崩壊以後、このハンガリーも1989年に社会主義国家から共和国へと変貌していきました。ベルリンの壁の崩壊の糸口となったピクニック作戦は、この地ハンガリーで行われたことは事実であります。ハンガリー人の非常に勤勉でかつ優秀な国民性はノーベル賞受賞者数が多いことによっても証明されましょう。

私は、日本の国土館大学に一年間留学経験を有する

滞在先の大学院の学生と出会うことが出来ました。彼女はセルビアとハンガリーの2重国籍を有しています。先日、彼女の故郷であるセルビアのゼンタという小さな町と一緒に訪問し、ホームステイもさせていただきました。ゼンタは、ハンガリーの旧テリトリーであり、ハンガリー人が95%を占め、公用語はセルビア語ではなくハンガリー語でありました。往復の列車の中で、彼女のパーソナルヒストリーを聞くことが出来たので、その話を紹介してみたいと思います。セルビアはとても経済的に貧窮しており職を得ることが難しいこと、父親は家族のために職業を転々と変えなければならなかったこと、彼女自身は高校生からハンガリーで生活しており、ハンガリーの国籍を有したのは3年前であり、国籍の取得のためには4 - 5年を要したこと、取得のプロセスが煩雑であり祖母は取得できなかったことなどの話を聞くことができました。1920年までは、ハンガリーを取り巻く6カ国のボーダー周辺はハンガリーの旧テリトリーでありました。現在のハンガリーは、全領土の2 / 3の土地を失っています。したがって、周辺諸国に取り残された多数のハンガリー人たちは、他国にしながら自国の文化を維持・発展させてきています。ハンガリー政府は、2004年に周辺諸国に居住するハンガリー人に国籍を付与するかどうかの国民投票を行ったそうですが、その結果、付与しないが付与するを僅かであるが上回ったそうです。ハンガリーの複雑な国内事情を垣間見るエピソードを滞在先の若い大学院学生から聞いたことは感慨深いものがありました。

謝辞

招聘教授として私の訪問をサポートしていただいた、セメルweis大学体育スポーツ科学部長の Prof. Mihaly Nyeges, 副学部長 (研究・国際交流担当) で友人の Prof. Radak Zsolt, さらには副学部長室秘書の Mrs. Szilagyine Barra Jolan に格段のお礼をもうしあげます。 (健康科学センター)



世界一の美しさを誇る国会議事堂

サークル紹介



アメリカンフットボール部チアリーダーパート “ETOILES (エトワルス)” 紹介

農学部3年 原 幸子

私達はアメリカンフットボール部チアリーダーパート“ETOILES (エトワルス)”です。現在、3年生1人、2年生7人、1年生7人、合計15人で活動しています。普段の練習は、六本松の体育館で週3回行っているのですが、いつも騒がしく、キャプテンは保母さん状態です。よく言えばにぎやかで元気があるので、“チアリーダー”としてはこの位のテンションが必要なのかもしれませんが…。でも騒がしいだけではありません。やる時はすごく集中します。(もちろん笑顔は忘れずに！)

先日、7月9日、福岡市民体育館で九州チアリーディング大会が開催されました。この大会は予選がなく、九州のほぼ全チームが出場する大会で、私達のチームは初めての出場でした。九州には全国でも優勝経験のあるチームや私達では到底敵わないようなチームばかりあって、緊張と不安でいっぱいでしたが、チアリーディングというスポーツを更に好きになれた大会でした。チアリーディングでは他の競技と違って競い合っているにも関わらず、他のチームが演技をする際には全チームが一体となってそのチームを応援し、会場を盛り上げてくれるので楽しく演技をすることができました。本当に楽しかったです！！

ETOILESの秋はアメフトがシーズンに入るため、応援に力を入れます。それと同時に唯一の学内発表である11月の九大祭に向けて、再び演技をつくっていきます。そして冬には基礎練習とレベルアップを図った



練習をすると同時に、4月に新しく入学してくる新入生のための演技をつくっていきます。そして4月からは心機一転して新しいメンバーで、九州大会に向けて感動をつくりあげていくのです。

最近、少しずつチアリーディングが流行りだしてきていて、チアリーディングを知っている人が増えてきているようですが、まだ本当のチアリーディングを知らない人が少なくありません。なので、もっと皆さんに演技を見て頂ける機会があればと思っています。チアリーディングをやっていると、体を接触してのスポーツなので仲間との絆はとて強くなるし、観客を元気にさせるだけでなく自分も元気になれます!! とても素晴らしいスポーツだと自信をもって言えます。私達の部活はこんなスポーツをやっています。





Qpic (九大物理研究部) とは？

農学部 3年 林 久美子

別に物理な訳ではありません。

物理研究部...と聞くと、十中八九、何か難しい物理関係のことでもしてるのかと思われると思います。しかし別にそんなことは全くなく、主にパソコン、無線を使った活動をするサークルです。例を挙げれば、様々なゲームを作るには必須であるプログラミングや、パソコンで音楽を作るDTM、ホームページ作成から自作のパソコン、無線と、主に個人での活動を中心にしながら、多岐に活動しています。毎週金曜日には局会という会議を行い、お互いに情報交換などを行っています。

また、学祭では毎年、プログラミング班やCG班といった風に別れ、皆でパソコンを使ったゲームなどを作っており、それぞれ自分の長所を生かした取り組みをしています。

パソコンの知識って…。

かくいう私も入った当初は、ただ単に『ホームページを作りたい!』というだけで、なんらパソコンの知識はありませんでした。

ホームページを作ろうにも、まずその取っ掛かりがわからず、ホームページビルダーさえも使い方がわからないという状態。そんな状態から始めた私にとって、まず新入生を対象に毎年行われる、プログラミングからホームページまで、自分の希望するものの基礎知識を先輩から学ぼうという講座の存在はまさに天からの助けでした。本を読んでもわからない、というか飽きる...という私は、ちゃんと分からないところも教えてくれる先輩の存在は大きかったと思います。その甲斐あってか、五月に始めた講座が終わりかける七月には、もう参考書だけで自分の好きなようにサイトを作れるようになっていました。

趣味はパソコンでもいいんじゃない？

こんなことを言うと、もしかすると引きこもりなイメージがあるかもしれませんが、パソコンは本当に面白いものです。それはブログやmixiが流行している今、誰もが簡単に感じるができます。しかし、それはあらかじめ誰かが用意してくれたものを利用して

いるもの。ゼロから自分で作ったものではありません。プログラミングにしる何にしる、自分で最初から作るということはとても楽しいことだと思います。私はホームページ関係のみですが、それでもホームページビルダーなどに頼らずに、自分でHTMLとCSSを打ち込んで、自分のサイトを作る、それはゼロから理想のデザインを考え、それがどうすれば可能になるかを組み立てていく作業です。サイトの各ページの雰囲気統一したり、また写真などの素材をどう使うかなど、やればやるほど楽しくなってきた、まさしく寝食を忘れるようにパソコンにかじりついているのもしばしばです。

そしてもちろん、作るだけではなく完成したものを見てもらえるというのもパソコンの良いところです。個人の技術的な面と社交的な面、その二つを備えているパソコンで何かを作ってみたい、やってみてみたいという方は是非Qpicを覗いてみて下さい。技術よりも要は何かしたいという気持ち、それがパソコンには大切だと思います。



テーマ座談会

TAというもの ～教えることから学ぶこと～

最初、TAに行くときはどんな気持ちでしたか？

平野：実際距離的に六本松はちょっと遠いし、TAに行くことになったときは、結構億劫な気持ちだったような気がします。

岩谷：確かに、多少の不平不満もありましたし、上手く指導できるのかと不安もありましたね。

平野：自分も過去に履修していた授業で、内容は記憶に残ってはいたんですけど、教えるとなるとまた別物ですからね。

岩谷：TAに行くこと決まってから、先輩に話を聞いたりと、授業の内容を調べたりとか結構下準備のようなこともやってました。

平野：あとは後輩とのコミュニケーションが上手くいくかが一番の心配事でした。

岩谷：実際に3つほど学年を隔てているわけですし、どうしても壁が出来てしまいがちですからね。

平野：最初の自己紹介はものすごくドキドキしていたのを覚えています。

実際に行ってみてどうでしたか？

平野：TAの仕事は授業に使われる資料や機材の準備や、学生からの質問への対応と多岐に渡っていたから結構忙しかったですね。

岩谷：しかも、授業内容の性質上居残りをして作業をする生徒が多いから、日が落ちるまで教室に残っていました。

平野：正直、早く帰りたいと切に思っていました。

岩谷：でも、やはり自分達の後輩ががんばってる姿を見るとこっちもやる気が出てきちゃうんですね。結局、最後の生徒が帰るまで付き合っていました。

岩谷：あとは、やってみると意外にTAに対して学生

からの質問が多かったんですね。

平野：確かに。あんなに来るとは想定外だったよ。先生に聞いた方がわかるのになって、思ったよね。

岩谷：でも、自分が授業を受けた時を思い返してみると確かにTAによく質問していたような気がする。TAってというのは学生からしてみれば、気軽に何でも聞ける兄貴みみたいな存在だったしね。

平野：そうそう、ちょっとばからしいような質問は、やっぱり先生にはしにくいんですね。でも、TAにはなんかできるような気がしてました。そういう存在って学生にとっては重要な気がするんですよ。

岩谷：授業の内容だけじゃなくて、大学の先のことが将来のこととか、学生からしてみれば先輩に聞きたいことってたくさんあるからね。

平野：それを考えると、待ってるだけじゃなくて、こっちから積極的に話しかけてコミュニケーションを取っていくことが大事だってわかった。結構、気兼ねなく話せるようになるこっちも楽しいしね。

岩谷：それが功を奏したのかどうかはわからないけど後期の頃は、後輩の飲み会にも誘ってもらえたしね。

平野：確かにあれはうれしかったね。

岩谷：飲み会の席では、ちょっと先輩風を吹かせてしまったような気はするけど。

平野：あと、授業の内容で言うと、僕らの方にも結構学べるものがたくさんあったよね。

岩谷：そうそう、実際この授業を受けるのは学部1年の後期と2年の前期で、ほとんどの人があんまり講義の内容とか頭に入ってないんですね。

平野：情けない話ですけど僕もその一人でした。

岩谷：でも、修士1年になってもう一度聞いてみると意外にいいこと言ってるんですよ。建築の設計をやっていく上で、また、創造的な作業をやっていく上で大

M1前期：製図（建築学科2年生）

TAの心の声

建築製図法説明・平面図作図

断面図作図

中庭改造計画

中間発表

中間発表

講評会

緊張と不安

手探り状態

少し慣れてくる

テキパキ指導

TAなりの辛口講評



人間環境学府修士2年
岩谷有祐



人間環境学府修士2年
平野晋一

事なこととか、ほんとにすごい勉強になりましたよ。自分達が学部の授業を進んでいく中で、もやもやしていた部分とかがきれいに開けた気がしましたね。

岩谷：難しいことも結構あったよね。

平野：あったあった。質問への対応や、後輩の作品に対するコメントが難しかったね。

岩谷：授業の合間とか、終わった後に先生達にいろんなアドバイスをもらいながら手探りでやっていったような気がします。

平野：実際、TAっていうのは、位置付け的には先生のお手伝いなんですけど、僕らが先生の顔色を窺って話をしていたんじゃないかなまりよろしくない。建築っていうのはセオリーはあるけど正解はいくらでもあるわけですから、僕らも自分達の経験の中で学んだことや考えをきちんと発言しなくちゃいけない。

岩谷：たとえそれが先生の意見と違っていてもいいんだということだよ。

平野：そこから後輩達が、建築の面白さだったりとか、自分の意見を持つ大切さだったりとかを感じてくれればいいかなと思います。

岩谷：でもまあ結構知ったかぶりしちゃった部分も多々あるな。

平野：あるある。きわどい質問の時はね。

岩谷：でもそれが逆にいいことなんだよね。この先輩に聞いてもわかんないと思われたら終わりだよ。

平野：そうそう、質問された後で2人で議論したり先生に確認したりしたよね。

岩谷：でも、そういうきわどい質問が自分達にとっても、いい勉強になってるんだよね。

平野：自分達もまだまだ未熟だなんて感じるよ。

TAを通して学んだことやメッセージ等があれば？

岩谷：学んだことはたくさんありますが、1番はなんと言っても“人に教えることの難しさ”ですかね。伝えたいことが100あってもなかなか全部伝わらないんですよ。そして、教える側に立ってみて初めて、学生時代に学ぶべきことの多さやその内容の難しさがわかった気がします。一方で、学生には勉強の他にもアルバイトやサークル活動など今しかできない経験もたくさんあります。これから充実した学生時代を送る上で重要なのは、自己管理のもとでしっかり自分の技能を向上させていくことじゃないでしょうか。反面教師かもしれませんが、これからも自分の経験を後輩達に伝えていけたらいいなと思っています。

平野：そうですね、たくさんありすぎてどれを言おうか迷っちゃいますけど。後輩へのメッセージという意味も込めて。

建築の授業もTAも一言で言ってしまうと人と人との交流、またそこで起こる様々な意見のかけ合いが魅力だと思います。授業の中では、自分が上手くできない悔しさとか、劣等感とか、自分のやりたいことが伝わらない、上手くチームのメンバーや友達と話が出来ないようなもどかしさとかいろいろなことを経験していくと思います。でも今思えば、そのときに経験したことが、それからの自分を強く動かしていたような気がします。だから、そういった経験をいろいろな場所でして欲しいと思います。建築の作業は一人でやっても面白くない。自分の考えを発言し、また他人の考えを良く聞いて自分のやりたいことを見つけていって欲しいと思います。僕らも、授業を担当していた先生方や、後輩達との交流によっていろいろなことを学べたし、またひとつ成長できたと思うからです。

M1後期：空間表現実習（建築学科1年生）

TAの心の声

スミスハウスの透視図作図（下絵）

模型作成

透視図作図（ペン画と着色）

模型
講評会

透視図
講評会

様子見

気になる生徒を見つける

指導も慣れたもの

宴会のお誘いで有頂天

任期終了でさみしい



英語の新カリキュラム2006について

志 水 俊 広

今年度（2006年度）入学者から言語文化科目のカリキュラムが新しくなりました。その中でも最も大きく変わった、六本松キャンパスで開講される英語の新しいカリキュラムの特徴を紹介します。

まず、九州大学における英語教育の目標を従来にもまして明確にしました。六本松キャンパスで開講される英語科目の目標は、学部および大学院での学習や研究に必要な学術目的の英語（English for Academic Purposes）の基礎力養成です。いろいろな目的や理由で英語が学習されていますが、将来の必要性を考えて九大生には学術のための英語を学んでほしいと思うからです。九州大学は高度な学術研究の拠点として期待されています。そこで学ぶ皆さんが学術目的の英語を習得するのは当然のことですし、また学術のためのきちんとした英語を身につけることが、研究者だけでなく社会人としてビジネスで活躍するためにも有用だと考えるからです。

次に、内容による選択必修である英語を除き、同一科目には統一した目標を掲げ、初級レベルから上級レベルまでの段階別・技能別の授業を行います。旧カリキュラムから新カリキュラムにどのように変わったかを簡単に表にまとめました。下の表を見てください。

旧カリキュラム（1999年度～2005年度）

	1 年前期	1 年後期	2 年前期	2 年後期
理系： 6 単位 文系： 7 単位	2 単位	2 単位	理系：1 単位 文系：2 単位	1 単位
科目	英米言語文化演習 インテンシブ英語演習 総合英語演習	英米言語文化演習 インテンシブ英語演習 総合英語演習	英米言語文化演習 インテンシブ英語演習	英米言語文化演習 インテンシブ英語演習

新カリキュラム（2006年度から）

	1 年前期	1 年後期	2 年前期	2 年後期
理系： 6 単位 文系： 7 単位	英語 (大学英語初級) (1 単位必修)	英語 B (聴解読解中級) (1 単位必修)	英語 B (聴解読解上級) (1 単位必修)	英語 (内容による選択) (1 単位選択必修)
	英語 A (表現中級) (1 単位必修)	英語 A (表現上級) (1 単位必修)	英語 (文系のみ) (内容による選択) (1 単位選択必修)	

新カリキュラムの各科目を簡単に説明しましょう。

英語 I

比較的大人数のクラスで、大学入学以降の英語学習についての基礎情報を、共通のシラバスに基づき共通の教科書を使用して、学んでいきます。いわば大学英語入門で、ここで学んだことがその後の英語学習の土台になります。

英語 II A・III A

比較的小人数のクラスで、ライティングとスピーチを学び、英語の表現力をつけます。将来英語でレポートや論文を書いたり学会発表やプレゼンテーションをしたりするための基礎となる科目です。

英語 II B・III B

リスニングとリーディングを学びます。特に、日本人が不得意と言われるリスニングや多読・速読の力をつけるために、BとBのうち少なくともどちらかで(できれば両方で)コンピューターを使った授業を行い、英語を大量にインプットします。

英語 IV

指定された時間帯に開講されるさまざまな英語の授業の中から、皆さんが学習目標や関心に基づいて選択する科目です。

最後に、英語の学習は必修単位を取ったら終わりというわけではありません。むしろ、その後専門課程に進んだり、大学院に進学したり、就職したりしたときに英語が本当に必要となるのです。

六本松キャンパスで1、2年生のときに受講する英語科目はそのために大事な基礎力を養成するためのものです。

大学として明確な目標をもち、英語を体系的に学習するこの新カリキュラムにより、九大生の英語能力がさらに向上することを教員一同願いながら授業を行っています。また、今後のカリキュラム改善のために学生の皆さんもカリキュラムについての意見を授業評価アンケートや目安箱などでいろいろと出してください。(言語文化研究院)



A Passage to English を使った英語 I を受講して

法学部 1 年 藤 田 一 希

医学部 1 年 大 塚 友 希 実



英語 I は、一年次前期での履修科目となっています。授業のねらいは大学における学習・研究に必要な英語の知識や技能の基礎を習得するのみならず、英語圏の社会や文化の様相など幅広く身につけることが挙げられます。そのための教材として、共通教科書 A Passage to English (九州大学出版会) を使って授業が行われました。

具体的には英語の発音・文法・語彙といった高校までの基本的知識をさらに深めることから始まり、英語による電子メール・学術論文・ディベートの紹介、さらにはイギリス・アメリカの文化や、英語の現状などを学び、理解を深めました。大学入試を終えたばかりの一年前期でこのように多様な英語の学習を進めていくことで、単なる受験の道具としての意識から、国際規模で使用されうる生きたコミュニケーションツールとしての英語という意識への転換をスムーズに図ることができる、それがこの授業のねらいだと私は感じました。授業は毎週一回行われ、私のクラスでは授業の最初に先週の授業内容の小テストがあり、予習の大変さもさることながら小テストの勉強も大変でした。しかし学習した内容の定着をはかるには最も効率のよい方法だと思いました。授業の形式も、主に文法事項の確認に重点を置いて進められていた高校とは違い、英語では英文を通してあらゆる英語の知識を身につけることが念頭に置かれ、この点については大学における英語教育が将来的にも役に立ちうるものである、と感じました。一方で、授業内容の豊富さとスピードの速さに理解が追いつかない週は、予習と復習に多くの時間がかかり、大変な思いをすることになりました。



英語を受講してみて、受験勉強などでしてきた英語の学習とはかなり違うことに驚いた。これまで私が学んできた英語は、文法、文章読解、そしてリスニング対策にラジオ講座を聴くことなどであった。だが英語の講義はもっと英語を幅広く捉える方法を提示してくれた。

教科書の内容は、英語学習の基本的な方法から発音、英語の歴史、英語圏の文化、そして英語論文の書き方まで多彩な分野に及ぶ。どの章も大変なためになったが、特に興味深かったのは英語論文の書き方についての章だった。教科書の例として載せられていたのは文系の論文だったので、先生は理系の論文の見本も用意して下さった。そして文・理の論文を比較しながら、論文の構造や大まかな規則を教えてくださいましたので大変新鮮だった。今まで、論文というと堅苦しく難解そうで、ましてや英語論文などとても手の届かぬものだと感じていた。だが授業で先生が説明して下さるのを聴くと、正体不明だった英語論文が少し身近に感じられた。もちろん今は知らない単語が多すぎるが、各セクションが実験・観察方法を示しているのか、考察を示しているのかぐらいは把握できるようになった。それは右も左もわからないような状態から、大まかな道順を教えてもらったようで心強く感じられた。英語論文を読み書きするのは国際的な場で研究活動をしていくのに不可欠である。また、グローバル化が進む今、専門性を高めるためには英語を使った議論の場に参加することはますます重要になろう。そう考えると自分も英語論文を読み書きできるだけの語彙力・文法力を身につけ、読解・英作がすらすらできるようになりたい。そんなことを考えさせられ、英語学習への意欲がますます強くなる授業だった。

この他にも網羅する内容が多岐にわたっていたので、文・理問わず誰でも興味を引かれる部分がある講義であったと思う。もちろん授業だけで全ての内容を理解するのは困難だが、何かつまづいた時にはまたこの教科書を開けば、それを手掛かりに自分で調べるなどして解決の糸口を見つけることができる。そのような広い機会を与えてくれる講義だった。これからも英語学習を継続し、国際的な視野を持って仕事ができるようになりたい。



Reason to Write を使った英語IIAを受講して

文学部1年 ^{みなみ}南 ^{ゆき}侑 ^な奈

英語 Aの最大の特徴はほぼ毎回の授業で出されるエッセイの課題です。このエッセイは先生の添削と評価を受けた後に返却されますが、高校の頃までのようにただ文法的な誤りが少なければ高い評価を受けられるというものではありません。重要なのは、自分の主張を論理的に展開することと、それをよりネイティブに近い英語で表現することです。どれほど文法の知識を正確に使用していたとしても、論理が曖昧で説得力に欠ける内容では優れた英文とはいえません。そこで、私がこの授業を受けるにあたって最も心がけたことは、すべてのテーマに対して明確な自分の考えを持つということです。日本人は欧米の人々に比べて、ディベート力やプレゼンテーション能力に欠けるといわれます。しかしこれから、自分とは異なる価値観を有する人々と出会う中で、自分の意見をしっかり持ち、相手を納得させられる主張ができることは、一人の自立した人間として社会に貢献するために必要不可欠なことだと思います。そして、国際化がすすむ今日、議論の場が日本に限らないということは明白です。

英語 Aで使用しているテキストは大学1年生がスラスラと読める程度の難度の英語で書かれていますが、エッセイを書く上での英語表現の宝庫でありました。英語独特の言い回しや読み手をグッとひきつける表現テクニックなどを習得していく作業は大変面白く、母国語で書くよりも魅力的な文章が英語で書けるのではないかと思われてくるほどでした。最後の授業では、今まで書いてきたエッセイの中のひとつをクラスの前で発表しました。自分の主張をいかにして相手に訴えかけるかということもまた重要なポイントとなるわけです。発音はもちろん速度や声の強弱などに気を配ってプレゼンテーションをしていると、英語とは、ただ机の上で学習するだけ学問なのではなく、コミュニケーションの手段として私たちの頭、身体、心すべてを駆使して身に付けていくものなどだということを感じました。この授業では、私たちが社会に出た後にも必要とされる英語との関わり方を学ぶことができたと思います。



理学部1年 ^こ木 ^ば場 ^{けん}健 ^ご吾

英語 Aは主にライティング能力を向上させる目的の授業です。教科書では英文を書く際に必要な表現を学び、英語で書いたパラグラフをほぼ毎回添削してもらいました。

私は、この授業で、これまでの受験勉強とは大きく異なった方法による英語の学習のあり方に意義を感じました。高校入試のため、大学入試のためといった今までの学習は明らかに受動的なもので、その中になかなか面白さを見出すことはできませんでした。また充実感という点においても、受験勉強では、テストの点数が上がったということばかりがそれに結びついていましたが、今は英語で自分の考えが伝えられることに充実感を覚えています。無理に英語を強いられるのではなく、自分から英語に向かう姿勢がその感覚を生んでいるのでしょう。

しかし、その感覚も多くの苦労があったからこそだと思えます。大学に入学するまではリーディングに重きを置いた受験のための英語しか勉強したことなかった私にとっては、自分で文章を考えそれを英語で表現するというのは慣れないことでした。無論、頭の中にある日本語を英語にするのは単なる単語の置き換えではありません。やってみてわかったことですがひとつの名詞に多くの修飾語句がつくと非常に大変でした。はじめのうちは辞書をひいても英語独特のニュアンスが分からず、どの表現を使うか戸惑ったり、長くてくだい文を作ったりしました。納得のいかない自分の英語を少しでも良くしようとして、ひとつひとつのパラグラフを書くのに大変多くの時間がかかりました。

私は英語 Aの授業を通して、これまでの英語に向き合う姿勢が変わってよかったと思えます。自分から学ぼうとすることは英語能力の上達につながると信じています。



ITO New Campus



ウエストゾーン



ウエスト4号館



学生ホール



多目的ゼミ室



リフレッシュスペース



映画の世界～佐々部清監督が開く創造の扉～

すず き ゆう ぶん
鈴 木 右 文

筆者がオーガナイザーを務める総合科目「映画の世界」は、大学教養科目で取り上げられることの少ない映画に関して、特に分析的鑑賞と新旧の邦画について知ってもらうために開講している。18年度前期は「佐々部清論」を副題としており、6月14日には、佐々部清監督御本人に登壇いただき、自作について講義していただいた。

佐々部監督は「陽はまた昇る」でデビュー、その後「チルソクの夏」「半落ち」「四日間の奇蹟」「カーテンコール」と次々秀作を世に送り出し、9月には九大でもロケを行った反戦作「出口のない海」が公開された。

監督からは大学の講義ということもあって、初めて人前で話すという多くの裏話やトリビアも伺ったが、中核的部分を参考に、以下内容を筆者なりに紹介してみたい。監督は学生時代から映画にのめりこみ、山田洋次監督の「幸福の黄色いハンカチ」に決定的な影響を受け、自分の中にいつまでも残る映画は人の想いを描く作品であることから、アイドル路線に背を向け、心を描く感動作を目指している。下積みや助監督時代にも、「北の国から」や「ホテル」「鉄道員(ぼっぼや)」などの秀作の制作に関わりながら、自分の撮りたい作品を監督として手がけることを夢見てきた。

デビュー作「陽はまた昇る」は突然制作の話が回ってきたが、整理対象社員が奮起してVHS開発を成功させる過程を家族の想いととも描いた切れ味鋭い作品で、働くサラリーマンにエールを送った。

次作の「チルソクの夏」こそは監督が長年温めてきた作品で、故郷の下関を舞台に、日韓関係を絡めて、女子高校生の青春の「想い」を瑞々しく描き切った。アイドルの起用を避け、本物の映像を撮ることを大切にした。初恋は監督のキーワードのひとつで、「初恋の来た道」が講義の際に言及されたことでもわかる。

「半落ち」は日本アカデミー賞最優秀作品賞を受賞し、世間には最も知られている作品であろう。病に苦しむ人々とその周囲の人々の「想い」に心を寄せ、賞に値する玄人の出来ばえである。ミステリー物扱いは監督の好むところではない。



監督の講義では以上の三作が取り上げられたが、この科目では「四日間の奇蹟」も取り上げた。これは喪失と再生をテーマに初めてファンタジーを利用して、死を迎え送る人々の「想い」が語られる。ともすれば格調を崩しかねないファンタジーを表現方法として見事に昇華させている。

この後公開された「カーテンコール」は映画へのオマージュ、9月公開の「出口のない海」は反戦作で、個人的に撮りたいと思う作品から、映画そのもの、また社会へと制作の文脈が広がりを見せている。

講義では幾つかのポイントがあった。まず作品のファーストカットとラストカットに持たせた意味。「陽はまた昇る」「チルソクの夏」「半落ち」について、ファーストカットとラストカットに込めた意図の解説があった。次に評論家の評価に左右されずに制作すること。映画感想家としか言えないような理解力不足の評論家を気にすることは無いという自信が垣間見られる。原作との相違とその意図についても解説があった。特に「半落ち」で、殺人の後で少年のことを知ったことに変更し、少年に合わせるために妻を生かすことを考えなかった不思議に対する自然な理由を与えるようにしたことには、リアリティへのこだわりが感じられる。TVと映画の差異については、よそ見をしている視聴者をもつなぎとめようとしてわかりやすい説明に走るTVとの差について言及があった。この他、高倉健等を具体例に、俳優のプロ意識がなせる技の紹介があり(数年前にやはり九大で行われた東映の社長高岩淡氏(九大卒)の講義に突然ゲストで高倉健氏が現れた出来事を思い出す)、監督にとっての財産はスタッフであること(スタッフは照明さんなどと呼ばずに必ず名前で呼ぶ)などについて解説があった。また自作の特徴として、クローズアップが少ないこと、独り言の台詞が少ないことが挙げられた。クローズアップが少ないと、観客は好むところにフォーカスして鑑賞でき、押し付けがましい印象が避けられるし、場面説明を繰り返すような独り言は邪魔である。このしつこさ・饒舌さを嫌う作風は、ともすればべたべたしがちな人間ドラマや感動物というカテゴリーの作品をバランスよく成立させている理由だと言えよう。

質疑応答では活発に受講者から質問が出た。「チルソクの夏」の韓国人高校生を日本人が演じたのはなぜか(俳優の都合)、なぜストーリーを最後まで語らずにラストを迎えるか(続きを想像させる余韻が良い)、「半落ち」ではなぜ判決が実刑と映画では考えている

か(解釈は観客次第)、「チルソクの夏」でなぜ別れの後に不自然と思われる歌のシーンがあるのか(監督の失恋に関わる体験を盛り込みたかった)、なぜ過去の映像をセピア色にしないのか(一番輝いた日々をカラーで描きたかった)、スクリーンに映る作り物に想いを語らせるための工夫は何か(ごまかし・手抜きをしない撮影)、台詞が少ないようだがなぜか(俳優にどう演技で伝えるか考えさせたい)、といった7つほどの質問に答えていただいた後、新聞記者からの質問もあり(翌日の毎日新聞朝刊に記事が出た)、希望者にサインを残して教室を後にされた。

以上、監督御本人の了解を得て筆者が記事にしているが、御快諾くださった監督に感謝し、また御本人の意図を正確に反映していない部分があればお許し願いたいと思う。また、当日まで監督の登壇は伏せていたため、中には欠席して後悔している受講者の方もおられるだろうが、不必要な混乱を避けるための措置であったので御理解願いたい。最後に、新奇性に走らず邦画の伝統の中央を行く貴重な存在である監督の今後の活躍を祈って筆を置きたい。(言語文化研究院)



佐々部 清監督プロフィール

1958年1月8日、山口県下関市生まれ。
明治大学文学部演劇科、横浜放送映画専門学院(現・日本映画学校)を経て、'84年より映画及びテレビドラマの助監督となる。

主に崔洋一、和泉聖治、杉田成道、降旗康男などの監督に師事。現在に至る。

- ・日本アカデミー協会会員
- ・日本映画監督協会会員

**** 劇場公開作品 ****

「陽はまた昇る」「チルソクの夏」「半落ち」
「四日間の奇蹟」「カーテンコール」「出口のない海」

**** ホームページ ****

<http://www.sasabe.net/home.html>



「専門」呪縛からの開放： 私が私らしく学ぶ

なが の つよし
長 野 剛

私らしさを紹介するとなると

私たちの日頃の自己紹介は、氏名、出身地、所属学部などフォーマルな履歴書項目にそったものとなります。「鹿児島出身です」と自己紹介すると、「僕も鹿児島です」と応じる誰かがいます。「社会貢献のできる職業に就きたいと思っています」と自己紹介すると、「私も同感です」と応じる誰かがいます。互いの自己紹介に 同じ を見つけ合って、他者との間に親近感を見いだすことは大切です。しかし、せっかくの自己紹介なのに、履歴書項目の羅列には、私らしさが登場しないので、残念だなあと思うのです。

最近では、自己紹介に血液型が登場します。同じ血液型の者は大勢いるので、私らしさの表明にはならないと思います。いきなり私らしさを表明せず、まず、私と同じ血液型の人はいませんか、私らしさを表明しても安全な 同じ 者を探すことが習慣になっているのでしょうか。これは、大同小異型の自己紹介と呼べるでしょう。大同であるなら小異があっても大丈夫というわけです。

私らしさをありのままに甘受してみる体験が少なくなっているのかもしれませんが。「いや、そんなことはない」という反論がありそうです。自己紹介に「音楽が好きです」とか「時間があれば読書をしています」と私的なことを書いているという反論です。でも、「音楽が好きです」には、私らしさは表明されていないと思えるのです。音楽が好きという点で 同じ 者は大勢いますから。もし、「音楽が嫌いです」と大異を表明したら、「えっ」「どうして」「なぜ」という対話呼び起こすことでしょうか。だとしたら、私たちに安心をもたらす大同の表明は、私らしさの確かめ直しを妨げているのかもしれませんが。

さて、「音楽が好きです」に私らしさをこめるにはどうしたらいいかについて考えてみます。私は、自宅の書斎ではジャズを流しています。だからといって、「ジャズが好きです」と自己紹介すれば、私らしさの表明になるかというと、そうは思えません。「ああ、

そうですか」という反応だと、私の心が萎えてしまうくらい、その時々的心をジャズで確かめているからです。自己紹介の場の空気が白むのは、相手でなく、私らしさの表明の仕方に課題があると考えます。

スポーツ選手が競技の前にヘッドフォンで聞いている音楽は、おそらく、特定の歌手の特定の曲のはずです。でも、なぜその歌手のその曲なのか、説明は容易ではありません。マスコミのインタヴューに理由を答えたら、そのスポーツ選手には、理由づけに盛り込めなかった何かが残るはず。そもそも、私らしさは、不特定多数の者に伝わる言葉への翻訳を拒むように思えます。だからこそ、私らしさの表明には、「なぜ」「どうして」という相手からの問い返しが必要だと考えます。問い返しがあるとは想定されない場面で、私らしさについて語ろうとは思わないので、私たちは自己紹介を履歴書項目ですませるとも考えられますが、自己紹介は、私は何者か（私らしさはどこにあるか）という問いを更新し続けるにあたって、とても重要なきっかけです。

やや詳しく、「私が書斎で流しているジャズは、ピアノ・トリオの演奏が大半です。」と自己紹介しても、私らしさにはほど遠い気がします。「私には、原稿を書き終えるめどが立つと、決まって流している曲があります。この曲は、かつて遠距離恋愛の最中に、気もそぞろになる自分をシャキッとさせてくれた曲でした。今でも、なぜかこの曲によってプッシュされる私がいいます。」という自己紹介なら、私らしさの一端を埋め込んでいるのかなあと、今、考えます。なぜなら、この自己紹介は相手からの問いかけがあればなおのこと、「なぜ、この曲をかけてしまうのだろうか？」「なぜ、他のプレイヤーの演奏ではじっくりこないのだろうか？」「なぜ、昔と今で変わらないのだろうか？」などと想いをめぐらして、私らしさを自問自答する端緒になるからです。何はともあれ、他者と 同じ を寄せ集めると、ますます、私らしさが希薄になってしまうように思えるのです。

私らしく学ぶには

私らしさをインテンシブに確かめ問い直す機会の一つとして九州地区国立大学間合宿共同授業があります。この授業に、8月25日から28日まで、引率教員として参加しました。琉球大学、長崎大学、佐賀大学、福岡教育大学そして九州大学の学生たち60数名が集り、食べること、生きること というテーマのもとで講義やフォーラムが展開されました。

社会の変化として、私らしさを根っこや幹にして、じっくりと知識を涵養する暇がないほどの情報洪水が到来しています。また、勉強の到達度が試験で評価されるように、社会のそこかしこが学校化して、一事が万事、その成果が評価されるようになっていきます。こうした社会状況のもとで、学生たちの感性（物事を受容するアンテナ）は、ノイズや無駄を除去する機能と、自尊感情低下の危機を察知する機能を強化してきているようです。私たちは社会変化の影響を受ける存在なのだと改めて思いました。このことは、私らしさの掘り起こしを後回しにして、「専門」という言い方で最初に防衛的壁をつくってから討論を始めるというやり方に端的に現れていると思いました。

大学教員が、例えば、「私はコメの専門家です（コメについて長年研究してきました）から…」と、話し始めると、コメの専門家でない学生は、拝聴する態度を強いられます。これでは、教える先生と教わる生徒という固定した関係がもたらす窮屈さを大学（学生）の学びにまで持ち込むこととなります。合宿共同授業の最後のプログラムである全体討議で学生の発言に登場したのですが、「食育」という話題をめぐっては、教育学部の学生が専門的知識をもっているはず、「食のエントロピー」という話題は、文系学部の学生には難しく理系学部の学生なら理解できるはずといった分け方は、教育学部の学生や理系学部の学生を窮屈にしまい、討議の活性化を損なっていると思えました。私たちは、いつから自分が物事を知らないことが発覚するのを、これほどまでに用心するようになったのでしょうか。とても不思議な現象です。私は大学教員として心理学に足場を置いていますが、心理学の研究によってもたらされた知見の中で私が知っているのは万分の一に満たないかもしれません。なにしろ、世界中に心理学の研究者は何万人もいるのですから。

また、全体討議に臨んで、「これ以上、討議することは何もありません」と言う学生がいました。専門家の知識や意見が権威づけられてしまった状況は、門外

漢（アマチュア）としての学生が、「私にとっては…」 「私の体験からすると…」 など、私らしさに根ざした（学生の日々の体験からなされる）問いを発する余地のない状況でもあります。

さて、コメの専門家はいるのでしょうか。コメの流通、コメの成分、コメの醸造、コメ（稲）の品種改良など細分化された領域においては知識の多い専門家がいることでしょう。領域が細分化されるにつれ、際限なく専門家が登場することになります。ところが、細分化した領域の専門家の見解は、稲作に30年間携わり、いくつかの品種を試し、風水害に対処し、耕作機器を導入し、共同作業を工夫し、変動する収益に苦慮してきた稲作一郎さんの体験的知識を前にすると、黙さざるをえないという面があります。データや言葉にならない体験的知識は、一郎さんのみならず、二郎さん、三郎さんそれぞれにおいて、私ならではの系をなした知識です。合宿共同授業の本年度の「食べること、生きること」というテーマは、専門的知識と日常生活において私たちがそれぞれに培っている体験的知識とが遭遇するテーマでした。しかし、「専門」という呪縛によって生じた滞りがありました。

教養は、私らしさを見いだす力に通じるのでは

合宿共同授業は、毎回、教養（教育）の根幹にかかわる示唆をもたらしてくれます。学生の日常体験の観察（今回は、日々の食生活の振り返り）と、大学教員が（専門領域そのものではない）テーマのもとで自らの知識を構成し直す講義とが紡ぎ合わされる教育の場は、学生にとっては、私ならではの問題（課題）発見の仕方を学ぶ場として、大学教員にとっては、問いかけるように語る方法を学ぶ場として、両者共々に取り組み甲斐のある授業だと再確認しました。

高度化する社会で、個人の裁量への期待が高まると、これまでのピラミッド型社会とは異なり、私の仕事や居場所を私が見いださなくてはなりません。私自らが何にどう取り組むかを探すとすると、学生一人ひとりに求められるのは、為すべきことが決まっていな不安定な状況に置かれても動じない能力を培っておくことだと思えます。これは、関係がないとされている知識や誰もが看過している知識を統合して新たな価値を見いだす力です。その礎になるように、「専門」呪縛を傍らにおいて、私が私らしく「学ぶ」教養教育を構築したいものです。

（高等教育開発推進センター）



想定外のおもしろさ

—学生相談カウンセラーからのメッセージ—

た なか たけ お
田 中 健 夫

堅物学生 vs. いい加減教員？

先日新聞(06.2.20日経)にこんな記事が載りました。

広がる学生の「まじめ化」：「カレッジソング(校歌)を歌える証拠を示せ」同志社大の百合野正博教授が約15年にわたり「監査論」の学期末試験に出す“珍問”だ。名物教授の遊び心に学生たちは、歌声を入れたカセットテープを答案用紙に張り付けたり、試験後に研究室で直接歌ったりと応じてきた。

それが最近では回答がないのはまだいい方。学長あてに「校歌は講義に関係なく不公平」と電子メールも来た。百合野教授は「昔の学生は余裕があった。今は融通が利かない」と苦笑いする。

こういうエピソードに皆さんはどう反応しますか。「昔の学生は～」という言葉があると、拒否反応を起こすかもしれません(・) たえば、「こんな問題を出すなんてありえない」と切り捨てますか。「昔懐かしいおらかな文化だなあ」とため息をつきますか。意外性や、教員との交流(駆け引き)のさまに大学らしさを感じるのでしょうか。学生も教職員もたいへんに忙しいキャンパスの中では、想定外のことを、遊び心をもって楽しむ余裕なんて到底ない、というのが一番の実感かもしれません。

勉強 vs. 豊かな人間関係

どうも最近では、こういったエピソードには事欠かないようです。学生の方が厳しく出席を取ってほしいと教員に求めてくる、試験範囲をきっちり明示してほしい、一部学生を再試で救済するなんて不公平だ、などのクレーム。間違いのない堅固な修学システムを追求することで、学生の方が自分の首を絞めていっているようにもみえます。

この記事は続けて、大学生活の重点を「勉強」に置く学生が、「豊かな人間関係」を97年に抜いて1位となり、今や差は広がるばかりとあります(大学生協の調査)。大学時代に、自分とはタイプの違う同級生(あ

るいは異性)や先輩、大人との豊かな人間関係を経験することは、なによりも重要だと私などは思ってしまうのですが、この数年の間にも大学生活は様変わりしているようです。思っていた以上に勉強が忙しくて他のことができない、という声を聞くことは確かに少なくありませんが。

あるいは「人間関係」がオプションになっているような現実があるのでしょうか。全学教育の授業で、「友人関係が深まると必ずズレや期待はずれ、ぶつかる事態が起こる。それは避けえないもので、そのときにどう対処するかで関係は深まりも壊れもする」という話をしたところ、「友達と喧嘩することはありえない」という反応が複数返ってきました。友達とのやりとりでズレを感じて不満が湧いてきて...ということは日常的にあるはずだと思うのですが、それが顕在化する前に未然に(自分の中で)防ぐ、ということなのでしょう。そうした“滑らかな”人間関係には、手応えは少ないのかもしれませんが。

想定外のおもしろさ

忙しすぎて余裕がなかったり、“大学という場所はこういうところだ”“自分はこういう人間だ”と「狭い概念(先入観)」を固くもちすぎると、異なる発想を受けつけることは難しくなります。曖昧な事態の中で自由に「遊べること」は、すこし余裕がないとできないことだろうと思います。

ところで大学生活は、皆さんの想定内で進んでいますか。予想の範囲内にほどほど入っていれば、まあ充実した、自分のコントロール感を保てた生活になるでしょう。一方で、想定外のことが起きたり、自分でも驚くほど何かのにめり込んでしまう、というようなこともあるでしょう。そんなときに、限界性や違う世界に触れることを通して、自分の中心となるものが形づくられていくように思います。想定外のことが起きたときに自分がどうなるか それはとても苦しい、困ったことかもしれませんが おもしろい事態ではないでしょうか。(学生生活・修学相談室 カウンセラー)

各学部・学府の相談員（2006年度）

学生生活・修学相談室には常任相談員（カウンセラー：3名）の他に、各学部・学府の相談員の先生方がいます。履修や専門領域の修学上の相談などについて、必要に応じて紹介ができるようになっています。

文学部	助教授	岡崎 敦	工学部	教授	片山 佳樹
教育学部	教授	田嶋 誠一	工学部	教授	島谷 幸宏
法学部	助教授	武内 謙治	工学部	助教授	武部 博倫
経済学部	教授	中井 達	工学部	助教授	和泉 直志
理学部	助教授	若狭 智嗣	芸術工学部	教授	包 清博之
理学部	教授	久下 理	芸術工学部	助教授	竹之内 和樹
理学部	助教授	池田 剛	芸術工学部	助教授	伊原 久裕
理学部	教授	綿谷 安男	芸術工学部	助教授	尾本 章
理学部	助教授	谷村 禎一	芸術工学部	助教授	鶴野 玲治
医学部	教授	吉田 眞一	農学部	教授	大庭 道夫
医学部	教授	佐々木 雅之	比較社会文化学府	教授	高野 信治
医学部	教授	松崎 彰信	人間環境学府	教授	大神 英裕
歯学部	教授	中村 誠司	数理学府	教授	綿谷 安男
歯学部	教授	二ノ宮 裕三	システム情報科学府	教授	赤岩 芳彦
薬学部	助教授	西田 基宏	総合理工学府	教授	永島 英夫
工学部	助教授	赤司 泰義	21世紀プログラム	教授	副島 雄児
工学部	教授	和田 清			

学生生活・修学相談室のホームページ

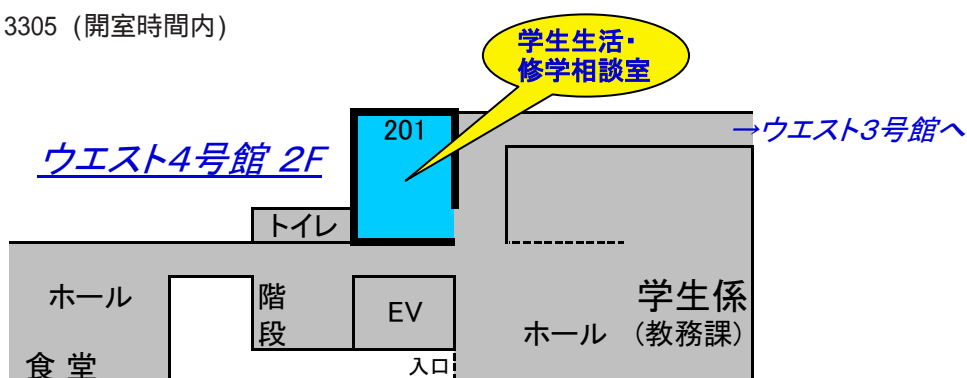
<http://cg.rc.kyushu-u.ac.jp>

伊都キャンパス分室の紹介

昨年10月、伊都キャンパスに「分室」がオープンしました。移転をめぐる生活上の不安や修学環境の変化などについても、相談を受けつけています。どうぞお気軽にご利用ください。

開室日 月水木 13:00～17:00

Tel. 802 3305 (開室時間内)



表紙・裏表紙話



(表紙)

貴方が季節を感じる瞬間、というのはどういう時でしょうか。長袖が半袖に変わった時でしょうか、それとも桃やスイカや梨など季節の果物が多く店頭に並び始めた時。もしくは毎年の祭や、定期テストだったりするかもしれません。

そんな中、私はとりわけ野外で咲く花に季節を感じるような気がします。ハウスで栽培される、春夏秋冬花屋で売られるような花ではなく、空の下に咲く花。春には桜やツツジ、夏には露草、秋には萩や金木犀、冬にはサザンカや椿。あまり花屋では見かけないような花が、自分に季節を教えてくれていたのに気づいたのはつい最近のことでした。



(裏表紙)

昔は中学校に咲くツツジは何気ないものでした。それなのに一人暮らしをして、それが急に身近になくなった途端に、急に寂しくなったのです。遠出をしてもツツジが見たいと思いました。季節の側に、常にそんな花があったのを私はまるで当たり前のように感じていたのに気づいたのです。

もし貴方が外に出たときに、余裕があれば、是非周りを見回して欲しい。今はツツジは無いでしょうが、その季節季節の植物が、きっと季節を教えてくれることだと思います。

(農学部3年 林 久美子)

あ と が き

暑さの中にも秋を感じる今日この頃です。長い大学の夏休み、みんなのように過ごしたのでしょうか。今年は随分暑い夏でした。夏を満喫した人もいれば、通常はできない研究や勉学に励んで意義ある時間を送った人もいるでしょうし、夏バテになってしまった人もいるかも知れません。

健康相談室に疲れや適応障害で来談する学生さんは年々増えてきていますが、休み期間に十分な休養をとって回復し、休みの後はもう治療に來られなくなる方も少なくありません。休養して心の余裕を回復することは、やっぱりとても大切なことです。上手な養生は医者いらずの鉄則ですね。

学生さん、それに教職員の方々も、長い特別な時間をもてる大学の利点を上手に利用して、また充実した半期を元気に過ごされますように…。 (AI)

第50回田島寮祭 櫻～想いつなく一本の絆～

第50回田島寮祭を終えて.....中野 一静... 2
田島寮祭を振り返って.....圃 轟... 4
第50回田島寮祭に寄せて.....樋渡 和浩... 5

世界・日本 26

ドイツ・インターンシップ研修旅行記
笹部 誠子... 6
国際協力を学ぶ.....小松 太郎... 8
ハンガリー共和国セメルweis大学
体育スポーツ科学部滞在記.....熊谷 秋三...10

サークル紹介 38

“ETOILES (エトワルズ)” 紹介
原 幸子...12
Qpic (九大物理研究部) とは?
林 久美子...13

TAというもの ~教えることから学ぶこと~

岩谷 有祐 平野 晋一...14
英語の新カリキュラム2006について 志水 俊広...16
A Passage to English を使った英語
を受講して 藤田 一希 大塚友希美...17
Reason to Write を使った英語 A
を受講して 南 侑奈 木場 健吾...18
I T O New Campus19
映画の世界
~佐々部清監督が開く創造の扉~ 鈴木 右文...20
「専門」呪縛からの開放：私が私らしく学ぶ
長野 剛...22
想定外のおもしろさ
- 学生相談カウンセラーからのメッセージ -
田中 健夫...24

投稿・写真歓迎

編集委員会では radix への投稿、紙面を飾る写真を募集しています。あなたが関わっている様々な活動、六本松地区や「全学教育」にまつわる出来事、六本松の思い出など、六本松や「全学教育」に関するものであれば何でも結構です。

表紙写真も、キャンパスでのもの、旅先でのものをはじめ、あなたの作品、ぜひ紹介したい知り合いの作品など、広く募集しています。応募、推薦の対象は六本松や「全学教育」に関わりのある全ての方です。

radix 学生モニター募集

編集委員会では radix に対する学生の意見・要望を聞くためにモニターを募集しています。また学生編集委員も募集しています。募集は常時行っています。

投稿、写真、学生モニター・編集委員の応募は下記で受け付けます。

編集委員 池田 伸夫 (工 学 ☎642-3763)	石井 豊 (数 理 ☎726-4722)	一宮 厚 (健 七 ☎583-7858)
(06年度) 伊原 久裕 (芸 工 ☎553-4514)	大石 一夫 (事務室 ☎726-4582)	大津 隆広 (言 文 ☎726-4668)
小山 紘三 (高推セ ☎726-4585)	瀧本 太郎 (経 済 ☎642-2485)	田中 健夫 (高推セ ☎642-4802)
西野 常夫 (比 文 ☎642-4600)	宮本 智文 (薬 学 ☎642-6636)	
学部教育係 (事務室 ☎726-4872)		



radix(ラーディクス)
No.45(九州大学全学教育広報)

発行日 2006年9月29日
発行所 九州大学高等教育開発推進センター
〒810-8560 福岡市中央区六本松4-2-1
電話 (092)726-4872
Fax (092)726-4530